

Safety Report セーフティポ こども

特別支援学級や特別支援学校の先生方による児童・生徒への交通安全教育

障がいのあるこどもが自立と社会参加を見据えた教育を受けられるように、特別支援学級※1や特別支援学校※2がある。特別支援学級や特別支援学校の児童・生徒に対し、先生方はどのような交通安全教育を行っているのか、その手法を紹介する。

「危険予測トレーニング」を活用する 安中市立原市小学校の特別支援学級

群馬県にある安中市立原市小学校の特別支援学級担任教諭 岩井典子さんは7月3日に4～6年の児童6名に対して「安全に生活しよう」をテーマにした学級活動を行った。「特別支援学級のこどもへの教育は 実際に見たり聞いたり体験したりすることがとても大切です」と岩井さんは話す。本来、校外で信号機を見たり、道路を横断しながら指導することがベストなのだが、それらを気軽に実施できない現実がある。そこで、岩井さんが目をつけたのがHondaのウェブページで連載している動画による「危険予測トレーニング※3」（以下、KYT）だ。「GIGA スクール構想※4」で、こどもは1人1台タブレット端末を持っているので、それを使ってできるコンテンツを探しました。HondaのKYTはクルマやバイクだけでなく、歩行者や自転車の視点のケースがあり、こどもたちが日常生活の中で出会う交通場面です。自分でやってみて、危険場面の直前で一旦停止するのが良いと感じました。この時に、これから起こり得る危険を考えることができるからです。7月3日の学級活動で、岩井さんが使用したKYTの題材は「住宅街の横断歩道」と「雨の日の歩道」。危険場面の直前で停止したシーンの画像を児童のタブレット端末に送り、その画像



KYT「住宅街の横断歩道」の問題場面は、学校から自宅へ帰る途中の横断歩道を渡るシーン。右側の白いクルマが止まってくれたので急いで渡ろうとする時、何に注意すべきか考えてもらう。正解は、白いクルマの後方にあるバイクが止まらずに横断歩道を通過して、ぶつかりそうになる。このバイクにスタンプ（色付きの丸印）を付けた児童が多かった



の上に危険と感じたところを児童にスタンプで示してもらう。「スタンプの色は一人ひとり異なるため、一斉に表示させることで、各々がスタンプを付けた箇所の共通点や相違点をこどもたちもわかるようにしています。そして、危険と思った理由を尋ねていきました。

岩井さんが正解となる箇所をタップし、動画の続きを再生。ヒヤリハットにいたる過程を児童に確認してもらう。「最初のシーン『住宅街の横断歩道』では、多くのこどもが正解できたのですが、次の『雨の日の歩道』では正解者はいませんでした。こどもたちは、続きの映像を見て『そんなの想像できなかった』と口をそろえていました。この反応は私のねらい通りで、危険は自分の思いもよらないところにあることに気づいてもらえたと思います。

各シーンで正解を提示した後、その危険を回避するためにはどのように行動すべきか、自分で考え、さらに他の児童とも相談してもらう。その後、「道路は右左をちゃんと見て、車が止まってからわたる」「よくかくにんしてわたる。手を上げてわたる」など、各自で考えた「これから気をつけたいこと」をタブレット端末に入力して、この日の学級活動は終了となった。「自分たちが考えて発した言葉でまとめることが、深い学びにつながります。自分が事故に遭わないようにするには、交通ルールを守る、道路を渡る時は一旦止まる、左右を確認する

KYT「雨の日の歩道」の問題場面は、雨の降る日に学校から自宅へ帰るために歩道を歩いているシーン。前方で手を振っている友達に駆け寄ろうとしている時の危険を考えてもらう。正解は止まらずに進むと、左側の路地から出てくる自転車とぶつかりそうになるのだが、児童のほとんどは右側から路地へ曲がろうとするクルマにスタンプを付けた



安中市立原市小学校では特別支援学級担任教諭 岩井典子さんがKYTを活用



という行動が大切であるという方向にまとまっていきました。KYTはクイズ的な要素があり、児童が気軽に取り組める教材だと岩井さんは感じている。「終わった後、こどもたちから『他のシーンもやってみよう』と声がかかるほど好評でした。2学期は自転車視点のシーンを使ってみました。

これまで岩井さんが指導した児童の中には、横断歩道をなかなか渡れない児童がいたそうだ。「そこは学校の前にある横断歩道で、クルマの往来が多いわけではありません。他の先生方とも協力して『こうすれば安全に渡れるよ』と毎日、何度も繰り返し指導しました。それを数年続けて高学年になって一人で安全確認して渡れるようになったのです。このように、特別支援学級の児童への交通安全教育は、指導する側の根気強さが求められる。「言葉だけで説明する通常学級の教え方では、特別支援学級のこどもは上手く想像力をはたかせることができません。実際の交通場面や、危険場面をいたる過程が動画でわかるKYTは役立ちます」と岩井さんはいう。

「デジタル交通安全かるた」を取り入れた 東京都立青山特別支援学校

東京都立青山特別支援学校（東京都港区）は小学部と中学部で構成されている。同校ではスクールバスによる通学を基本としているが、児童・生徒の自立に向けて一人通学（自宅から学校まで徒歩や公共交通機関を利用する通学）の練習も実施している。

中学部主任教諭 和泉澤賢司さんは、7月から生徒への交通安全教育にHondaの「デジタル交通安全かるた（以下、デジタルかるた）」（P2参照）を取り入れた。

「Hondaが教員にデジタルかるたを無償で提供していることを知り、興味があったので問い合わせしてみました。実際にデータをいただいて自分で使ってみたところ、交通安全を勉強する教材として最適だと感じました」と和泉澤さんはいう。

「読み札は短い文章で、端的に交通安全に必要なことを伝えられます。解説部分のアニメーションでは、歩道橋や一時停止標識など絵札の中でポイントとなる部分が強調されるのもわかりやすいと感じました。

児童・生徒はGIGAスクール構想でタブレット端末を利用しており、小学部の国語の授業でかるたに触れた経験があることから、違和感なく取り組むことができると考えた和泉澤さんは、まず一人通学の練習をしている生徒に使ってもらうことにした。毎週1回、休み時間など授業の合間に、和泉澤さんと生徒がタブレット端末で「デジタルかるた」を実践する。「例えば、見通しの悪い場所で『立ち止まり 右と左を確かめて』という札を勉強する時、もし右と左を確かめなかったらどうなってしまうか、生徒に問いかけます。絵札や読み札に表現されていない、ある意味、抽象的なところを想起できるようにサポートするのです。そして、安全確認をしないと事故につながることを意識してほしいと思っています。」



「デジタルかるた」を使っている生徒は「自分の端末でできるので操作は簡単です。繰り返しやったことで、道路を歩く時はクルマに十分注意しないと危ないことがわかりました」と語った。

同校では、地元の警察署と連携して交通安全教室を実施している。「社会で自立して生活していく上で必要なことですが、交通安全教室はその1日に限られてしまいます。繰り返し学習することで児童や生徒の力になっていくので、空き時間にできる『デジタルかるた』は、とても活用しやすいと思います。授業



生徒は自分のタブレット端末で利用



校内には模擬の横断歩道と歩行者用信号機が常設され、学校生活の中で児童・生徒に交通安全教育ができるようになっている

東京都立青山特別支援学校では中学部主任教諭 和泉澤賢司さん（写真右）が「デジタルかるた」を生徒への交通安全教育に活用

ではないので、気楽に使うことができ、一緒にやっていると楽しいんです。和泉澤さんは他の教員にも広げたいと考えた。

- ※1 小学校、中学校等において障がいのある児童・生徒に対し、障がいによる学習上または生活上の困難を克服するために設置される学級。
- ※2 障がいのある幼児・児童・生徒に対して、幼稚園、小学校、中学校または高等学校に準ずる教育を施すとともに、障がいによる学習上または生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けることを目的とする学校。
- ※3 詳細は以下のホームページ参照。
<https://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/training/>
- ※4 全国の小・中学校の児童・生徒1人に1台のコンピューターと高速ネットワークを整備する文部科学省の取り組み。